

発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第5回】
学校にねがいをたぐり寄せる



金沢大学
河合隆平

かわい りゅうへい
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全
障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著
書に『発達保障ってなに?』共著（全障研出版
部）など。

ねがいを寄せ集める「器」

今年の全国大会が開催される鹿児島県には、離島があります。島ごとに現状は異なりますが、特別支援学校がないため、より手厚い指導や支援が必要な子どもたちは、特別支援学校に就学するために6歳で島を離れるか、島で訪問教育を受けるかという選択を迫られてきました。特別支援学校を選択すると家族が離れ離れになることもあります。訪問教育とはいえ、身近に特別支援学校があれば十分に通学可能な子どもたちもいます。

離島という固有の環境や実情に応じて、子どもの発達を保障する仕組みをつくる努力もなされていますが、私たちは「子どもに合った学校がほしい」と語り、特別支援学校の分教室設置を求めてきました。¹⁾「生まれた島で暮らしたい、育ってほしい」というねがいは、「学校がほしい」というねがいと分かち難く結びついている。学校へのねがいは、子どもの発達保障や幸福な生活へのねがいを寄せ集めていく「器」だと思うのです。

1979年の養護学校義務制実施以前、「学校に行きたい・行かせたい」という声が無数に発せられ、その切実なねがいを受けとめながら教育権保障運動が広がりました。障害のある子どもの発達や権利保障へのあらゆるねがいが、学校へのねがいにたぐり寄せられていった時代の経験に学びながら、「学校に行きたい・行かせたい」というねがいがつくられてきた歴史的な意味を考えてみましょう。

学校から排除される悲しみを原動力に

義務制実施以前、重い障害のある子どもたちは就学猶予・免除によって学校から排除され、福祉施設を利用す

るにも猶予・免除が求められました。1970年代に入っても全国で2万人を超える不就学障害児がいました。

春

みんながうきうきする春が／もうすぐやってくる／入学式、一年生／みんな晴れがましい顔／でも／ひろ子ちゃんのママは、また／頭から／ふとんをかぶって／泣くのかな／ことしで三回目／入学式の日は／いつも／そんなの

信君はもう大きいけど／歩けないからママがおんぶ／ママがつぶれそう／学校に行きたくても／口がきけないし／歩けないから／入れてくれない
身障児の学校はあるけれど／とても遠くて／通えないんだ／すぐ熱がでるもん／そして手足がすごく／痛いんだ

かおるちゃんは／真っ赤なランドセルを／買ってもらった／学校へ行くと／ハリキッていたけど／やっぱり三年猶予して／そのままいけなかった／いまはもうないけど／ママは／真赤なかおるちゃんの／ランドセルを机において／かわいい笑顔を／思いだしている
また入学式が近づいた／今年は／頭からふとんをかぶって／泣くママが／何人いるのかな

学校から排除される悲しみを綴ったこの詩は、東京都文京区で不就学をなくす運動に取り組む母親が書いたものです（『障害をもつ子どものグループ連絡会ニュース』No・11、1971年）。母親は、学校に行くことを望みながら亡くなった娘（かおるちゃん）への償いとして運動に参加し続けたそうです。運動の仲間とともに創ったこの詩は、教育権保障運動に取り組む人びとの思いと響き合うようにして広がり、運動の原動力となりました。

ぼくらにも教育・医療・福祉を —文京区心身障害児実態調査委員会

東京都文京区では1971年から72年にかけて、親や教師を中心に「文京区心身障害児実態調査委員会」がつくられました。当時、東京23区内に知的障害のある子どもが通える公立養護学校はありませんでした。文京区には国立大学附属の養護学校があっても入学できるとは限らず、特殊学級のある学校も少なく、在宅生活を強いられる「未就学児」がたくさんいました。調査委員会では未就学児の親にアンケートを配り、母親と教師や学生がペアになって一軒ずつ家庭訪問して実態や要求を詳細に聴き取り、20人分の生きた情報と切実な声を集めました。「未就学児」という呼び方には、本来就学できる子どもたちが未ださせられないでいる状態への批判が込められていました。

障害のある子どもたちは成長とともに、からだが大きくなり体力もついてくると、母親の手で外出することも難しくなる。就学を迎える頃には、母親と二人きりの在宅生活に閉じ込められ、生活リズムが崩れ、単調な生活が繰り返されていく。子どもの発達する力は奪われ、できていたことすらできなくなり、いのちを落とす子どももいる。とくに母親は子どもにつきっきりのため仕事もできず、買い物に行く余裕すら奪われ、家族以外に頼れる人も少ない。調査は、学校に行けないことが子どものいのちと生活の土台を奪い、家族の生活や労働、人間関係を収縮させて、子どもの発達の停滞や退行をもたらしている実態を明らかにしました。

その状況をなんとかしようと、地域では親や大学生サークルによる自主的なグループ保育も行われました。すると、子どもが言葉を話すようになる、落ち着いてくる、友だちを意識して遊ぶようになる。調査は、親や家族以外の人からの教育的な働きかけや集団が保障される